



Title	シングリッシュにおけるoneの機能
Author(s)	チュー, アンバー
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2021, 17, p. 52-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81764
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

シングリッシュにおける *one* の機能

アンバー チュー

【キーワード】シングリッシュ、名詞化、モーダル化、不変化詞、接触言語

【要旨】

本稿では、シングリッシュにおける不変化詞の *one* の機能について考察する。筆者が内省した例文に基づき、*one* が省略された場合文として成り立たないケースと *one* が省略されても文として成り立つケースに分けてデータを整理し、分析を行った。その結果、*one* は文を名詞化する機能を果たしているが、名詞化することでモーダル的な意味を文に付加する場合もあるとみられた。平叙文において、*one* を文の末尾につけると、文に話者の主観が付加され、断定するというモーダル的な機能を果たす。また、Yes/No 疑問文においては、*one* は文の内容を話者自身の認識や見解であることを示し、Wh-疑問文では、*one* は、話者が文の内容に対する強い感情や意見を持っていることを表し、その質問の回答を知る強い意欲を表す。もともと名詞化する働きをしていた *one* は、モーダル化が進み、意味機能が拡張したと考えられる。しかし、*one* はまだ完全にはモーダル化していないとみられ、不変化詞の連続相の中で考えると、*one* のモーダル化はまだ完全には進んでおらず、nominalizer と modal particle の中間的な段階にあるという仮説をたてることができる。

1. はじめに

本稿では、シングリッシュにおける *one* の機能について考察する。シングリッシュとは、シンガポールの多言語環境の中で生まれた、英語をベースとした言語で、英語、マンダリン、中国語方言、マレー語、タミル語などのさまざまな言語的要素が混ざった言語体系である。シングリッシュの文法は独特で、主に中国語式の文法などが英語に適用されるなどの特徴を持つ。

本稿で取り上げるシングリッシュにおける *one* は、英語の代名詞 ‘one’ と同じ機能を持つが、ほかの機能も持っていると考えられる（以下、() の中の文はシングリッシュの例を標準英語に訳した文である）。

(1) This one not I want *one*. (This is not the one I wanted.)

(2) He very handsome *one*. (He is very handsome.)

上記の例から見れば、イタリック体の *one* は標準英語の代名詞 ‘one’ と異なる働きをしていることが明らかである。(1) を見ると、*one* という単語は同じ文において2回出てくるが、それぞれの機能が異なると思われる。下線を引いた *one* は標準英語と似たような機能を持っているのに対して、イタリック体の *one* は標準英語の用法と異なる。(2) のイタリック体の *one* も標準英語と異なる用法を持つ。

本稿では、筆者の内省に基づいて、*one* のさまざまな機能を整理し、分類する。

2. 先行研究と問題のありか

シングリッシュの不変化詞の *one* は、ほかの不変化詞 (*lah, leh, lor* など) に比べ、あまり研究されていないが、シングリッシュの *one* を取り上げる先行研究はほぼすべて、それをマンダリンで主に nominalizer の働きを持つ「的 (de)」と英語の代名詞 ‘one’ に関連づけてきた (Gupta 1992a; Alsagoff and Ho 1998)。次のような例である。

- (3) (マンダリン) 白 的 是 我 的。
 (シングリッシュ) The white one is my one.
 (英語) The white one is mine. (Gupta 1992a, p.329)

(3) であげたマンダリンの例では、イタリック体の「的 (de)」は形容詞の「白」を名詞化し、名詞句の主要部として働いている。英語の例でも同じように、英語の代名詞 ‘one’ も名詞を主要部として持たない名詞句の主要部として働いている。この面で、英語の代名詞 ‘one’ はマンダリンの nominalizer 「的 (de)」に似ており、シングリッシュの *one* はこの2つの形式の合流によって生まれたものとして見られる (Gupta 1992a)。

Gupta (1992b) によると、シングリッシュの *one* は主に nominalizer として機能しており、ときどき断定を表す語用論的不変化詞 (pragmatic particle) として使われることもある。それは、英語の ‘one’ と中国語の nominalizer と断定の語気助詞 (マンダリンでは「的 (de)」、広東語では「嘅 (ge)」、福建語では *ê*) の合流によるもので、その合流は結果的にシングリッシュの *one* において、英語の ‘one’ の機能の拡大と、中国語の nominalizer の機能の削減をもたらした (Gupta 1992a, p.334。表 1 を参照)。

表 1 中国語の nominalizer (マンダリン「的 (de)」、広東語「嘅 (ge)」、福建語 *ê*)、標準英語‘one’、シングリッシュ *one* の機能の比較 (Gupta 1992a:337)

	中国語	標準英語	シングリッシュ
1. Nominalizer	○	×	○
属格			
2. 名詞と名詞の間	○	×	×
3. 修飾語と名詞の間	○	×	×
先行詞との共用			
4. 指示語の後、名詞なし	△ *福建語のみ	○	○
5. 語用論的不変化詞	○	×	○
その他			
6. 数字として	×	○	○

Alsagoff and Ho (1998) はシングリッシュの relative clause (関係節) において *one* の使用も見られると主張した。しかし、Bao (2009) が指摘したように、このような使い方はそれほど多くはなく、筆者が内省した結果、Alsagoff and Ho (1998) で挙げられた例の使用は現在あまり見られなくなったと思われる。

- (4) ? The cake John always buy *one* very nice. (The cake that John always buys is very

nice.)

- (5) ? The man (who) sell ice-kachang *one* gone home already. (The man who sells ice-kachang has already gone home.)

Bao (2009) によると、シングリッシュの *one* の生起条件は以下の通りである。

シングリッシュ:

{A- *one*, N- *one*, P- *one*, *one* -XP, XP-*one*₁, XP-*one*₂}¹⁾

(A =形容詞; N=名詞; P=代名詞; XP=句と節)

Bao (2009) は XP-*one*₂ 以外、すべて *one* が主要部になる NP (noun phrase; 名詞句) であると主張するが、表層構造上形が同じ XP-*one*₁ と XP-*one*₂ の区別については、イントネーションや使用文脈によって区別できるとしか言及しておらず、詳しい区別の仕方を挙げていない。

Wong, J. (2005) は、シングリッシュの *one* は少なくとも二つの同音異義語が存在し、それを分けて考えるべきであると主張した。Wong, J. (2005) によると、代名詞の *one*、nominalizer の *one* と不変化詞の *one* はそれぞれ存在するが、代名詞の *one* と nominalizer の *one* は両方とも明示的な主要部を持っていない NP において末尾にくるという共通点を持っているため、代名詞の *one* と nominalizer の *one* を、名詞の *one* としてまとめ、不変化詞の *one* と区別している。名詞の *one* は文法的な役割を果たしているため、*one* を省略した場合、非文になるという点から不変化詞の *one* と区別できる。

Gupta (1992b) と Wong, J. (2005) によると、不変化詞の *one* は文に断定や強調などの語用論的な意味を付加する。この *one* は文法的な役割を果たしていないため、*one* を省略しても文法的に正しい文になる (Wong, J. 2005)。しかし、断定や強調の意味を付加するものでも、*one* を省略すると非文になる文もある。次のような例である。

- (6) That picture he draw *one*. (That picture was drawn by him.)

- (6') *That picture he draw ϕ .

また、Wong, J. (2005) によると、不変化詞の *one* は平叙文の最後にくる、もしくは *lah* や *meh?* などのほかの不変化詞に後続されると主張しているが、平叙文だけでなく、疑問文においても生起すると考えられる。次のような例である。

- (7) Who give you *one*? (Who gave it to you?)

本稿では、Wong, J. (2005) が *one* の用法について挙げた区別の基準を使用し、*one* が省略された場合文として成り立たないケースと、*one* が省略されても文として成り立つケースに分けてデータを整理し、本来名詞化機能を担っていた *one* のモーダル化について言及しながら、そのデータの分析を通して *one* の機能を明らかにしたい。なお、*one* とマンダリンの「的 (de)」との関係については、Gupta (1992b) や Wong, J. (2005) などの先行研究において分析や説明が行われているため、本稿ではマンダリンの「的 (de)」との関係については取り上げない。

以下、本稿では、第3節において *one* が省略された場合文として成り立たないケースを

1) XP-*one*₁ は nominalizer として機能するケースで、XP-*one*₂ は断定や強調など、語用論的な意味を表すケースを指す。

分析し、第4節で *one* が省略されても文として成り立つケースの分析をする。

3. *one* が省略された場合、文として成り立たないケース

one が省略されると文法的に不適格になるケースには、次の3つがある。

- ① *one* が名詞的に使用された場合
- ② 直接目的語の主題化が起こり動詞の直後に *one* がついた場合
- ③ 主題が省略された上で直接目的語が文の中で明示されていない場合

以下、具体的に例をあげて説明する。

3.1. *one* が名詞的に使用された場合

まず、*one* が省略されると文法的に不適格になるのは、名詞の *one* が使用された場合である。この場合、すでに述べたように、名詞の *one* は名詞句の主要部として働いている。たとえば (8) の場合、“the school library *one*” は[[the school library]_{NP} *one*]_{NP} のような構造を持っており、日本語の[この本は[[学校図書館]の (もの)]だ]の「の (もの)」に類似する。ここでは *one* の前に修飾語句として名詞句がきている。

(8) This book is [[the school library]_{NP} *one*]_{NP}. (This book belongs to the school library.)

(8') *This book is the school library ϕ .

以下の例についても同様である。

(9) Wah, [[the soccer team]_{NP} *one*]_{NP} damn nice! (Wow, the soccer team's (...) is really nice!)

(9') *Wah, the soccer team ϕ damn nice! (文法的に問題はないが、別の意味になる)

以下の (10) と (11) では、*one* は形容詞句を名詞化し、名詞句の主要部として働いている。

(10) This is [[good quality]_{AdjP} *one*]_{NP} hor. (This is of good quality okay?)

(10') *This is good quality ϕ hor.

(11) I don't want the [[square square]_{AdjP} *one*]_{NP}. (I don't want the square one.)

(11') *I don't want the square square ϕ .

また、

(12) [[I buy] *one*]_{NP} very fast spoil already. (The one I bought spoilt very quickly.)

(12') *I buy ϕ very fast spoil already.

のように、主語+動詞に後接する場合もあり、この場合 *one* は、主語+動詞から構成される連体修飾節の被修飾語の働きを担い、省略することはできない。以下の例も同様である。

(13) [[My mother make] *one*]_{NP} better than those in the shops. (The one my mother made is better than those in the shops.)

(13') *My mother make ϕ better than those in the shops.

なお、*one* が指示する名詞は (8) のように文中で言及されている場合もあれば、(9) ～ (13) のように文脈から具体的に何を指しているかがわかる場合もある。この場合、*one* の意味は文脈に依存しているので、直示的で、代名詞的な用法であると考えられる。

Wong, P.S. (1994) は、その他、(12) と (13) のように、動詞が *one* の前にくる場合、その NP が目的語になる以下の例も挙げたが、筆者が内省した結果、現在はその用法はあまり見られず、*one* が構成する NP は一般的に主語にあたることが多いと考えられる。

(14) ? Don't worry, I'll take I can eat one (i.e. what I can eat). (Wong, P.S. 1994, p.12)

3.2. 直接目的語の主題化が起こり動詞の直後に *one* がついた場合

次に、*one* は、文の目的語が主題化された文にも必ず使用される。Bao (2001) によると、シングリッシュはトピック優勢言語 (topic-prominent language) であり、主題化 (topicalization) は頻繁に起こると見られる。主題化はさまざまな形をとるが、ここでは主に直接目的語の主題化を扱う。文の直接目的語が主題になり、文頭に置かれる場合、*one* が目的語の位置 (ほかの不変化詞に後続される場合もある) につく。以下の例文において、主題はイタリック体で示している。また、(15'') ~ (18'') の例文は、主題化が起こらない文である。

(15) *This bag* [[my mother give me] *one*]. (This bag was given to me by my mother.)

(15') **This bag* my mother give me ϕ .

(15'') My mother give me this bag.

(15) では、'give' の直接目的語である 'this bag' は主題になり、文頭に置かれ、*one* がその代わりに文末につく。主題化が起こった場合、文末の *one* が省略されると文として成り立たなくなる。以下の例についても同様である。

(16) *The chicken* [[she eat] *one*]. (The chicken was eaten by her.)

(16') **The chicken* she eat ϕ .

(16'') She eat the chicken.

また、

(17) *This picture* [[who take] *one*]? (This picture was taken by whom?)

(17') **This picture* who take ϕ ?

(17'') Who take this picture?

(18) *That article* [[he write] *one*] ah? (That article was written by him?)

(18') **That article* he write ϕ ah?

(18'') He write that article ah?

のように、この現象は平叙文だけでなく、wh-疑問文、Yes/No 疑問文でもみられる。以上の例文から、主題になった直接目的語が文頭に移動し、*one* が動詞の直後、つまりその直接目的語の元の位置に置かれるとみられる。おそらく、主題化が起こって動詞の直後に直接目的語がこない場合、この *one* は直接目的語の残留代名詞のような機能を果たすと考えられる。しかし、直接目的語が主題であれば、文のほかの部分に主題について情報を与える題述の部分になり、その情報に焦点が当てられる。つまり、主題化が起こると、主題となった部分以外の部分に焦点をあて、焦点が当てられた内容が強調されるとも言える。その上、名詞化の機能を持つ *one* を使用することによって、*one* の前にくる内容はその *one* にあたるものを限定する情報として捉えられ、その情報は真であることが暗示されることが考えられる。

3.3. 主題が省略された上で直接目的語が文の中で明示されていない場合

一方、主題化が起こった場合でも、主題がすでに提示されている場合、あるいは文脈からわかる場合、文からその主題が省略される場合が多い。この場合、主題がなくても主題があるのと同じ効果が得られる。以下の文は (15) ~ (18) から主題を省略したものである。主題が省略された場合でも *one* は題述の部分の末尾につき、強調という主題化の効果が残ると考えられる。

(19) My mother give me *one*.

(20) She eat *one*.

(21) Who take *one*?

(22) He write *one* ah?

このように、主題が省略された場合でも、*one* はその前にくる発話内容を強調する機能を果たす用法で使用されるようになったと考えられる。そこで、このような場合に *one* は名詞化の機能から、「強い述べ立て」を表すモーダルな機能を果たす形式に用法が拡張したと考えられる。以下の例文において、強調されている部分は下線で示している。

(23) (話者が相手のクッキーを食べたと疑われるのに対して)

Not I eat *one*. (It wasn't me who ate it.)

(24) (相手がいないときに現場にいる人のもう一人が相手のノートに水をこぼしてしまい、相手が戻ってきたときに誰がやったかを聞いたのに対して)

He do *one*. (It was him who did it.)

(25) (仕事を見つけたらご飯をおごると相手が言ったのに対して)

Okay you say *one* ah. (Okay it was you who said that yeah? i.e. 言ったのはあなただ、約束守ってね。)

これらの例は、直接目的語が文の中で明示されておらず、*one* が動詞の直後にくる点では上の例と同じである。この場合、*one* は名詞と不変化詞の両方の機能を持っていると考えられ、*one* を省略することはできない。話者がイタリック体で示している部分を主張する意味が加わっており、*one* はここで「強い述べ立て」という語用論的な意味を付加する機能も果たしていると考えられる。

以上、本節では、*one* を省略できないケースとして次の3つをあげた。

- ① *one* が名詞的に使用された場合、
- ② 直接目的語の主題化が起こり動詞の直後に *one* がついた場合、
- ③ 主題が省略された上で直接目的語が文の中で明示されていない場合

次の4節では、*one* が省略されても文として成り立つケースを整理し、分析を行う。

4. *one* が省略されても文として成り立つケース

本節で扱う *one* は名詞的な機能より、語用論的な意味を付加する不変化詞の機能を持っているものであり、この点、Wong, J. (2005) の主張と一致している。この場合、*one* は省略可能である。上述した通り、もともと名詞化の機能を持つ *one* を文末において使用する

ことによって、*one* の前にくる内容は真であることが暗示され、その内容に対して断言や主張の語用論的な効果をもたらすと考えられる。しかし、Wong, J. (2005) は、この不変化詞の *one* は平叙文の文末にしか現れないものであると主張しているが、wh-疑問文においても生起すると考えられる。以下、平叙文 (4.1 節)、Yes/No 疑問文 (4.2 節)、wh-疑問文 (4.3 節) において生起する *one* を詳しく分析する。

4.1. 平叙文に生起する *one*

まず、物事の性質や状態などについて述べる際に、平叙文の末尾に *one* をつけることができる。ここでは、大きく、次の3つの用法に分けて整理しておく。

- ① 意見や判断の主張
- ② すでに実現した事態についての主張
- ③ 未来の事態についての確信

4.1.1. 話者の意見や判断の主張

文の末尾に *one* をつけることによって、発話内容は話者自身が持っている知識や経験に基づいて形成した意見や判断であることを示し、話者はそれが真であることを主張する意味を付加する。たとえば、以下のような例である。以下の例文では、性質や状態を表している部分を下線で示している。

(26) This question very simple *one*. (I'm telling you, this question is very simple.)

(26') This question very simple ϕ .

この例は、「この問題は非常に簡単なものだ」といった意味を表しており、*one* がない場合と比較した場合、*one* が入ったほうは、話者自身がその問題、あるいは似たような問題を解いた経験があるという解釈ができ、その経験に基づいて「非常に簡単だ」という意見に至ったというニュアンスが入っている。*one* をつけることによって、話者は自分の言っていることに対して確信を表しており、聞き手にそれが真であることを主張する効果がある。以下の例についても同様である。

(27) I tell you is liddat (=like that) *one*. (I'm telling you it's like that.)

(28) This kind of example very hard to give *one*. (I'm telling you, these kind of examples are really hard to give.)

(29) The gear need to oil *one*. (I'm telling you, the gear needs to be oiled.)

(30) Tom always never do his homework *one*. (I'm telling you, Tom never does his homework.)

(31) Airport got Japanese food *one*. (Trust me, the airport definitely has Japanese food.)

一方、次のような、話し手の発話に主張という意図が含まれない場合には、*one* は使用できない。

(32) A: Tom got do his homework last night anot? (Did Tom do his homework last night?)

B: *No, he never do *one*. Why? (No, he didn't. Why?)

4.1.2. すでに実現した事態についての主張

さらに、*one* をつけることによって、話者はあるすでに実現した事態について、自分の経験や知識に基づいた、事態の背景に関する主張を強く表すことができる。以下の例文では、話者の主張を下線で示している。

(33) John hit me *one*. (I'm telling you, it was John who hit me.)

(34) No lah, is they jio him *one*. (Nah, it was them who invited him.)

(33) では、話者はジョンが自分を打ったという主張を表し、*one* がいない場合と比較した場合、*one* が入ったほうは、「最初にたたいたのは私ではなくジョンだ」といった弁明のスタンスが入っているといった違いがある。(34) も同様に、*one* が使用されることによって、「彼を誘ったのはあの人たちだ」ということに弁解の意味が付加される。

4.1.3. 未来の事態についての確信

また、未来のことについて話す際に *one* をつけることによって、そのことが絶対に起こる、あるいは絶対に起こらないという話者自身の確信を表すことができる。以下の例文では、未来に起こる・起こらないと話者が確信していることを表している部分を下線で示している。

(35) Aiya, it will be okay *one*. (Oh, it will turn out alright.)

(35) では、話者は何か「きっとなんとか解決される、大丈夫だ」という意味を表しており、*one* が文末に使用されることによって、「きっとなんとかなる」ということに対する話者の強い確信が表されている。その確信の意味を入れることによって、慰めや励ましの気持ちがより強く出ていると考えられる。一方、次のような、‘may’ など、主張をやわらげることばが使用された場合、*one* は使用できない。

(36) *It may be okay *one*. (It may turn out alright.)

また、

(37) This rain won't stop so fast *one*. (This rain won't stop so soon.)

の場合、「*one*」をつけることによって、話者は降っている雨の様子から、自分の過去の経験に基づいて、「この雨はそんなにはやく止まないよ」という断言の効果がある。次の (38) についても同様である。

(38) She won't tell you *one*. (She won't tell you.)

4.1.4. 他の文末詞との共起

なお、*one* は基本的に文の最後にくるが、(39) と (40) のように、*one* は下線で示しているほかの不変化詞に後接される場合もある。

(39) We got no break *one* lah. (We don't have a break.)

(40) But my English not that good *one* leh. (But my English isn't that good though.)

(39) では、休暇がないという事実を強調した上で、*lah* という不変化詞をつけることによって、さらに不本意ながらも受け入れるという感情的スタンスを表す。(40) では、自分の英語はそんなにうまくないという個人の意見を主張している。この主張に後接する *leh*

は、発話をやわらげる効果をもたらす不変化詞である (Ler 2005, p. 70)。この発話は、相手が話者に対して英語能力が必要なことを要求したのに対して答えた発話であると思われる。この文脈では「英語がそんなにうまくない」という命題内容が断る理由になり、話者は *one* で命題内容が真であることを主張し (*one* は命題目当て)、それを聞き手に伝える際に後ろに *leh* をつけてやわらげた伝え方をしている (*leh* は聞き手目当て)。このように、*one* をほかの不変化詞と組み合わせることによって、話者の態度をより細かく伝えることができると考えられる。

4.2. Yes/No 疑問文に生起する *one*

シングリッシュでは、Yes/No 疑問文は、主語と動詞の倒置が起らず、平叙文の語順のまま、文末に上昇調イントネーションをつける。*one* がついた平叙文の文末を上昇調で発音すれば、Yes/No 疑問文になる。たとえば、(29) の文末に上昇調イントネーション (ここでは疑問符で示している) をつければ、以下ようになる。

(41) The gear need to oil *one*? (Does the gear need to be oiled?)

ここでは、話者はギアの性質について質問しており、*one* をつけることで、「注油する必要がある」というのは話者自身の認識や見解であると含意し、疑問文にすることでその認識について確認している (確認要求を行っている) と理解できる。

また、以下の例文のように、平叙文の末尾に、*one* と、*hor*、*ah*、*meh* などの疑問を表す tag をつけて Yes/No 疑問文を作ることができる。

(42) Tom always never do his homework *one* hor? (Tom never does his homework right?)

(43) Peter speak Chinese *one* ah? (Oh, Peter speaks Chinese?)

(44) Airport got Japanese food *one* meh? (The airport has Japanese food, really?)

(45) Not like that *one* ah? (Is it not like that?)

(46) Liddat also can *one* meh? (It works like that too, really?)

(42) では、話者は *one* をつけることで「トムがいつも宿題をやらない」というのは自分の確信をもった認識であることを示し、日本語の「でしょう？」にあたる不変化詞 *hor* をつけることでその認識が真であることを主張すると同時に、相手にその認識についての確認要求を行っている。(43) では、話者はピーターの中国語能力について自分の認識があるということを示した上で、応答を要求する不変化詞 *ah* をつけることによって、その認識の確認を行っている。(44) では、不変化詞 *meh* は話者の命題についての疑いを表し、*one* が入ることで、話者はもともと「空港では日本食 (の店) がない」という認識を持っていたが、それがああるということを知って驚いたということが含意される。このように、*one* は文の主な内容は話者の主観的な見解であることを示しており、Y/N 疑問文の形にすることで、相手に対してその見解についての何かの応答を要求していると考えられる。(45) と (46) も同様の説明が可能である。

4.3. Wh-疑問文

ある既に実現された事態や物事の状態、性質などに関する wh-疑問文の末尾に *one* をつ

けることによって、話者が質問の内容について何らかの強い感情を持っており、質問の回答を知る強い意欲を表すと考えられる。たとえば、

(47) Who take this picture *one*? (Who on earth took this picture?)

では、話者は、「一体誰がこの写真を撮ったの?」と質問し、写真を撮った人について強い疑問を表している。*one* が入っていることから、話者はその写真に対する何かの強い意見や感情（たとえばとてもうまく撮影されて、誰が撮ったのかを知りたい）を持っていることが含意され、疑問の意味合いを強めている。次のような例も同様である。

(48) Who tell them *one*? (Who on earth told them?)

(49) Why your internet so slow *one*? (Why on earth is your internet so slow?)

(50) How you do this *one*? (How on earth did you do this?)

(51) How he come *one*? (How on earth did he come?)

(52) Where she buy *one*? (Where on earth did she buy this from?)

(53) When she come back *one*? (When on earth did she come back?)

ただし、*one* と共起する *wh*-疑問詞の担う意味役割には制限がある。「What」と「which」などの疑問詞を用いた、目的語について質問する疑問文の場合、*one* は生起しない。

(54) *Which movie he watch *one*?

(55) *What he say *one*?

また、(56) と (57) のように、未来のことにに関する質問に *one* は使えない。

(56) *Who will tell them *one*?

(57) *When will she come back *one*?

それは、話題の出来事がまだ起きていないため、話者はそれに対する強い感情や意見を持ちようがないからである。

不変化詞の *one* はまた、*wh*-疑問文の形をとった修辭的疑問文 (rhetorical questions) にも生起する。修辭的疑問文は断定を強める効果があるが、*one* をつけることによって、さらにその強調の度合いを上げ、発話がさらに感情的に聞こえると考えられる。

(58) Why we so suay *one*? (Why are we so unlucky?)

(59) Since when canteen got such good food *one*? (Since when did the canteen have such nice food?)

(60) Eh, how can liddat *one*? (Hey, how could you do that?)

(61) Why you so bad *one*? (Why are you being so mean?)

たとえば、(58) では、「私たちの運が非常に悪い」ということを強く表現するために、「私たちなんでこんなに運悪いの?」という修辭的疑問文の形で発話されている。*one* が入ることによって、「運が非常に悪い」ことをさらに強調し、嘆きの感情をより強く伝えていると見られる。以下も同様の説明が可能である。

5. まとめと今後の課題

以上、本稿では、3 節で *one* が省略された場合文として成り立たないケース、4 節で *one* が省略されても文として成り立つケースを取り上げて、シングリッシュの *one* の用法を分

析した。

one が省略された場合文として成り立たないのは、次の3つの場合である。

- ① *one* が名詞的に使用された場合、
- ② 直接目的語の主題化が起こり動詞の直後に *one* がついた場合、
- ③ 主題が省略された上で直接目的語が文の中で明示されていない場合

いずれも、*one* が名詞的な機能を担う場合である。

一方、*one* は語用論的な機能を担う場合、省略しても非文にならない。ここで *one* はモーダル的な意味を文に付加するとみられ、平叙文と疑問文において使用できる。平叙文において、*one* を文の末尾につけると、文に話者の主観が付加され、断定するというモーダル的な機能を果たす。Y/N 疑問文においては、この *one* は文の内容を話者自身の認識や見解であることを示す。Wh-疑問文では、*one* は、話者が文の内容に対する強い感情や意見を持っていることを表し、その質問の回答を知る強い意欲を表す。

以上が本稿の分析結果であるが、省略された場合文として成り立たない *one* と、省略されても文として成り立つ *one* の関係については、まだ十分な分析を行ってはいない。*one* はおそらくもともと名詞化する機能のみを持っていたが、上述した②のように、文の直接目的語が主題化されて文頭に移動し、その代わりに動詞の直後に *one* がつく現象から、*one* は文の命題内容を強調する効果を持つようになり、モーダル化が進み、意味機能が拡張したと考えられる。このような、nominalizer の modal particle への文法化は、日本語の「の＞のだ＞んだ」や、韓国語の「*kes* > *kesita/kesiya*」など、ほかの言語においても見られる現象である (Yap et al. 2004; Rhee 2011)。

しかし、語順から考えると、シングリッシュの *one* はまだ完全にはモーダル形式になっていないとみられる。これは、*lah* や *meh* などのほかの不変化詞と共起した場合、*one* は常にその不変化詞の前に置かれる。つまり、断定する部分を名詞化する働きがまだ *one* に入っており、その部分との結びつきがほかの不変化詞より強いため、XP の直後に来なければならないからである。

Gupta (1992a) や Wong (2005) などの先行研究においても、名詞の *one* と不変化詞の *one* を区別しているが、ここで不変化詞の連続層の観点を入れることが重要である。*one* とほかの不変化詞の文であられる位置が完全には同じではないため、*one* のモーダル化はまだ完全には進んでおらず、nominalizer と modal particle の中間的な段階にあると考えられる。そのため、3節の後半であげた主題化の例などで見られるように、*one* は名詞化とモーダルの機能のどれを果たしているか、はっきり区別できない例もある。

本稿では十分に論じることのできなかった *one* の統語的な特徴や、wh-疑問文におけるwh-疑問詞との共起制限の背後にある理由、*one* のモーダルな形式への文法化の過程など、いずれも今後の課題として、詳しく分析していきたい。

【参考文献】

Alsagoff, L. and C.L. Ho. (1998). The relative clause in colloquial Singapore English. *World Englishes*, 17, 127-38.

- Bao, Z. (2001). The origins of empty categories in Singapore English. *Journal of Pidgin and Creole Languages*, 16(2), 275-319.
- Bao, Z. (2009). *One* in Singapore English. *Studies in Language*, 33(2), 338-365.
- Gupta, A.F. (1992a). Contact features of Singapore Colloquial English. In Bolton, K. & H. Kwok (eds.), *Sociolinguistics Today: International Perspectives*, pp. 323-345. London: Routledge.
- Gupta, A.F. (1992b). The pragmatic particles of Singapore colloquial English. *Journal of Pragmatics*, 18(1), 31-57.
- Ler, S.L.V. (2005). An in-depth study of discourse particles in Singapore English (Doctoral dissertation). Retrieved from <https://scholarbank.nus.edu.sg/bitstream/10635/14757/1/LerSLV.pdf>
- Rhee, S. (2011). Nominalization and stance marking in Korean. In Yap, F.H., K. Grunow-Hårsta, J. Wrona (eds.), *Nominalization in Asian Languages: Diachronic and Typological Perspectives (Typological Studies in Language 96)*, pp. 393-422. Amsterdam: John Benjamins.
- Singapore Department of Statistics (2017). *Population Trends 2017*.
- Wong, J. (2005). Why you so Singlish *one*? A semantic and cultural interpretation of the Singapore English particle *one*. *Language in Society*, 34(2), 239-275.
- Wong, P.S. (1994). The use of 'one' in Singapore Colloquial English (Honours thesis). National University of Singapore.
- Yap, F.H., S. Matthews, K. Horie. (2004). From pronominalizer to pragmatic marker: implications for unidirectionality from a crosslinguistic perspective. In Fischer, O., M. Norde, H. Perridon (eds.), *Up and Down the Cline: The Nature of Grammaticalization (Typological Studies in Language 59)*, pp. 137-168. Amsterdam: John Benjamins.

Amber CHEW (シンガポール南洋理工大学大学院生・大阪大学卒業生)
amberchewsihui@gmail.com